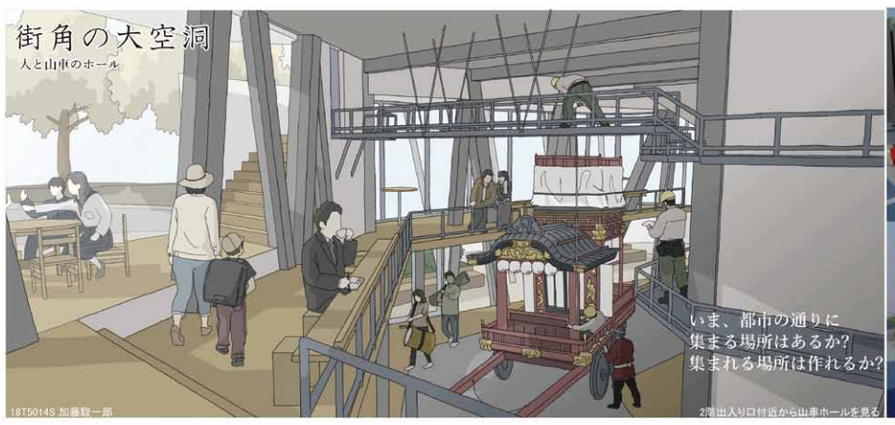


1. 集まりが生まれるはずだった街角

歴史ある都市の駅前通りに多く見られるように、黄門さん通りには間口の狭い空間を効率的に人が利用するために細分化した店舗や施設が立ち並び、通りに賑わいを持たせてきた。また銀杏坂通りは学校や図書館へと繋がる市民の生活に直結した通りであり、この通りが交わるこの敷地は多様な世代や地域の人々が集まることができる場所であった。しかし、現在では狭い空間に集まることれらの場所は人々から敬遠され、通りから賑わいが失われつつある。

2. 神を迎える「山車」と「お囃子」

水戸市には毎年開催される水戸黄門まつりの巡行で親しまれている13基の「山車」と、その賑わいの中心となる「お囃子」がある。山車やお囃子はかつて人が神を迎える際の目印としてつくられたものであり、神や人を魅了する存在感を持っている。

現在水戸市の山車は自治体ごとと神社の格納庫等に保管されているが、現在の社会状況においては各地で行事の開催や参加が困難な状況があり、人々がこれらの伝統に触れあう機会が失われている。

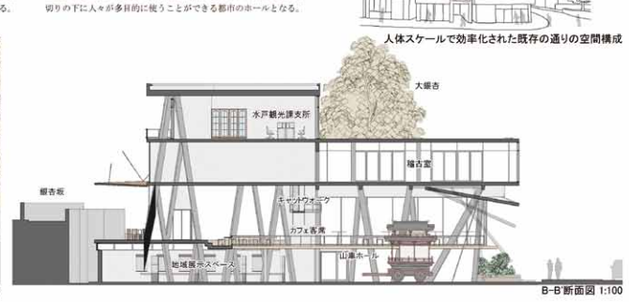
3. 非人体スケールでの新しい集まり方

この設計では、人のための細かい空間で構成された都市の駅前大通りに「山車」という巨大な装置と、それを格納するための非人体スケールの空間を挿入することで、「山車」や「お囃子」の持つ存在感に魅かれた人々がその巨大な空間に非人格的距離感の下に集まることができる、新しい集まり方を提案する。

山車のためにつくられた巨大な空間は、山車という稼働式の開仕切りの下に人々が多目的に使うことができる都市のホールとなる。

人体スケールで効率化された既存の通りの空間構成

A-A'断面図 1:100



B-B断面図 1:100

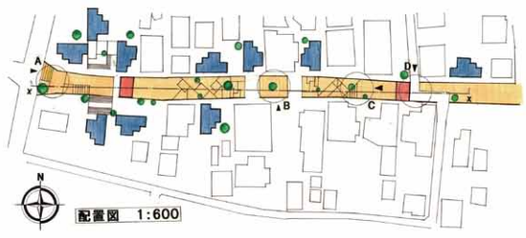
アフターコロナと街づくり

新しい時代の働き方と商店街の復興

旅け道状態になっている現在の商店街の道路は、近隣で交通渋滞を巻き起こし、近くの学校に通う生徒や学生にとっては、安全性が危ぶまれる状態にある。そこで道路を大胆に2m盛り下げ歩行者専用道とした。川の水の流れのような地上と地下をつなぐ、気まぐれでだらかな階段は、一つ一つのステップが広く、天気の良い日には人ノマドワークや休題所としても利用でき、人と人との出会いや会話が生まれる場所となる。

A部パース

B部パース



配置図 1:600

コロナ禍をきっかけにソーシャルディスタンスが叫ばれるようになり、オンライン学習やテレワークが増加し、パソコンーつで勉強や仕事ができる時代に変化しようとしている。そのことで、これまで問題視されながらもなかなか解決できなかった、職場の一極集中（大都市圏）や通勤ラッシュ等が緩和されるかたちになった。しかし一方で、仕事とプライベートの区別がしにくいことや、孤立感が増える等の問題点も起きている。

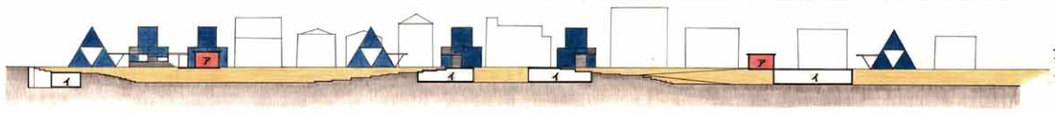
そこでサテライトオフィスを商店街に設置することで、職場の確保と商店街の復興を同時に解決できるのではないかと考えた。昔は地域の中心地でありながら、現在はシャッター通りをし、長い間そのままの状態で放置されている商店街は少なくないと想像する。オフィスと店舗を共存させることで人が集まり、賑わいが生まれ地域の復興につながるのではないかと考え、谷田部商店街をモデルに計画をした。この考えが一例となり、各地の商店街がオフィスと共に元気を取り戻してくれればとても嬉しく思う。

C部パース

D部パース

商店街としての再建にあっては現存する店舗はそのままとし、歴史が作る街の風情をできるだけ残したいと考えた。そこで新しい店舗スペースを道路位置（地下）に設けることで、新旧の店舗が上下で区分され、新たな建をもった商店街に生まれ変わる。またこれまでになかったオフィスがあることで新たな店舗が生まれ、ビジネスマンだけに限らず多くの人が集まる場所となる。

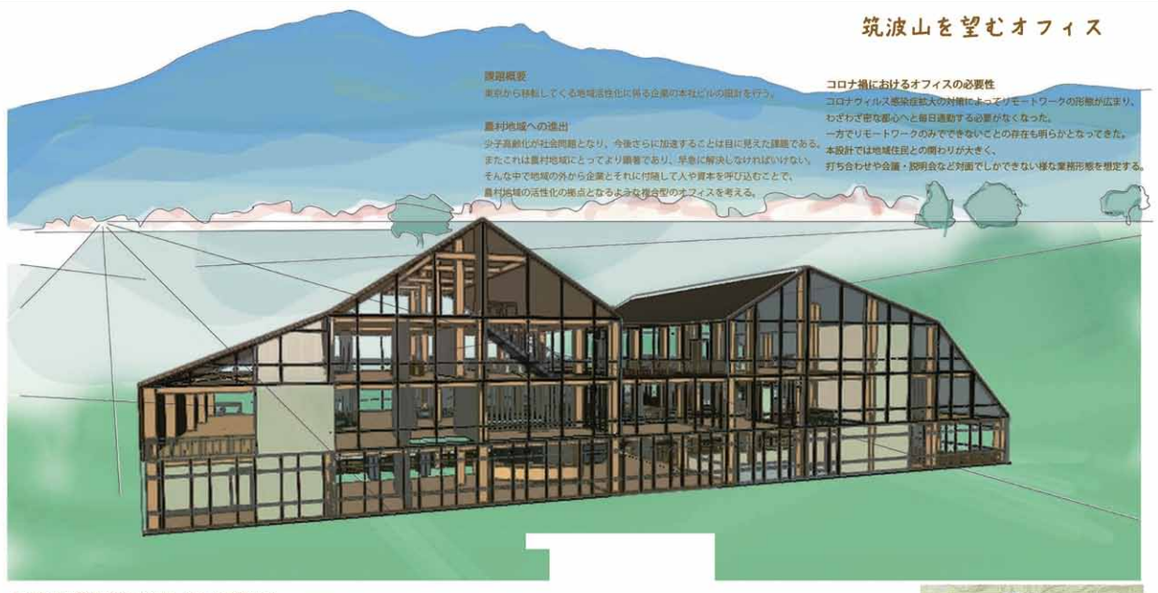
通りを挟んだ左右の商店をつなぐ橋の部分にシェアオフィスを設けた。Gレベルにありながら道路を掘り下げたことと等により、ガラス張りの建物からは視界が広がり、多くの人やものを感じることができる。ご近所に住む顔見知りのビジネスマンが気軽ねなく集まり、仕事はもちろん地域としての絆が強まる場所となる。



ア:Shared office
イ:店舗

X-X道路断面図 1:300

筑波山を望むオフィス



課題概要
東京から移転してくる地域活性化に伴う企業の本社ビルの設計を行う。

農村地域への進出
少子高齢化が社会問題となり、今後さらに加速することは目に見えた課題である。
またこれは農村地域にとってより顕著であり、早急に解決しなければいけない。
そんな中で地域の外から企業とそれに付随して人や資本を呼び込むことで、
農村地域の活性化の拠点となるような複合型のオフィスを考える。

コロナ禍におけるオフィスの必要性
コロナウィルス感染症拡大の対策によってリモートワークの形態が広まり、わざわざ密な都心へと毎日通勤する必要がなくなった。
一方でリモートワークのみでできないことの存在も明らかとなってきた。
本設計では地域住民との関わりが大きく、
打ち合わせや会議・説明会など対面でしかできない様な業務形態を想定する。

コロナウィルス感染症の拡大によるリモートワークの普及により、
本企業は地方へと本社ビルを移転した。

→都心から家族世帯が移住し、新たに地域へと参画する。

地域住民は自分の住んでいる地域について一番よく知っており、
課題の解決に意欲的ではあるがなかなか実行に移す機会や資本が足りない。

→本ビルを拠点とし、企業と連携・協力してもらいながら地域に働きかける。

1階を地域へと解放する。
→小中学生から お年寄りの方まで、地域住民間におけるつながりの拠点・憩いの場となる。
また、地元の野菜などの直売所を設けることで地産地消を促す。

波の綾

魚と私を繋ぐ波

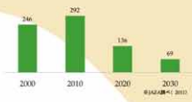
1. タイトル選定理由

【波の綾】
波によってつくられる水面のさざ波の模様を綾織物に例えた言葉。
別名「波の皺」（いけのしわ）。美い皺のような優しい印象の言。

波の綾のような幸せな日々を想わせる波を造形化

2. コンセプト

私たちは自然の変化と共に生きている。
自然災害は特に私たちの暮らしに影響を与え続けている。
その中でも波に対するイメージの変化は大きい。
怖いイメージばかりが目立ってしまうが、波の美しさや海から受ける恩恵はこれからも変わらないのではないかと感じる。
そこで「五感を刺激」することを重要視した水族館によって「波」に対するイメージの改善ができるのではないかと考えた。
ただ水族館を計画するのではなく、イルカの減少や水族館の衰退などの問題によって生じるこれからの水族館の在り方にも着目した。



バンドウイルカの今後の飼育頭数の予測

3. 配置図

住所：茨城県日立市

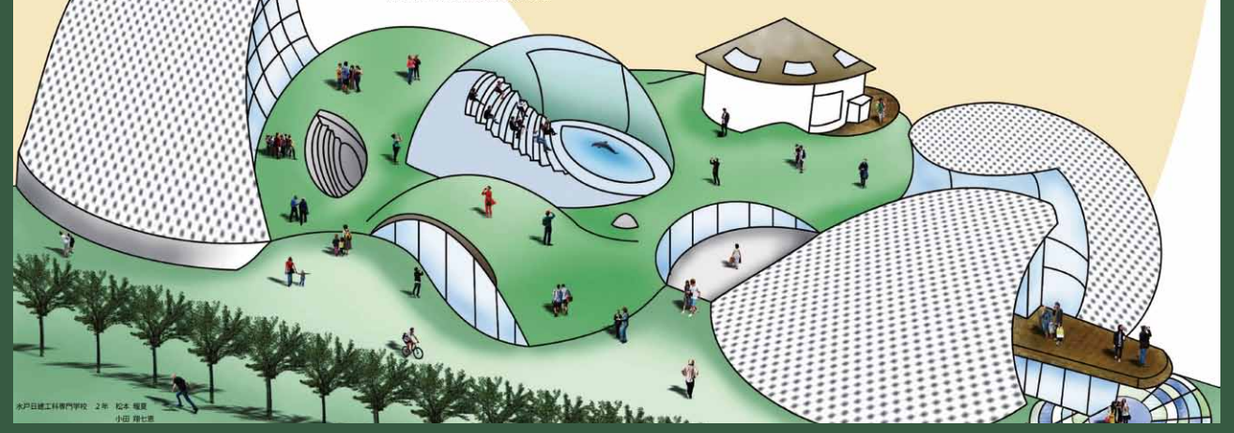
配置図 1/5000

日立市は広大な太平洋に面し、地方からの交通アクセスもしやすい。
しかし、人口減少によって街が衰退しつつある。
新たな人の流れをつくり日立市の活性化に貢献する。

4. ポイント

季節を巡る　五感　第2のショー

- 春夏秋冬でブース分けされており館内を一周できる。波に乗りながら海の生き物たちと季節を巡るような構成。
- 視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚の「五感」を刺激することを意識。
- イルカの減少の問題を考慮し新たなショーを確立させるべく、人が操るショーではなく生き物本来の自然体の姿をショーとして観せる「第2のショー」を計画。



水戸日建工科専門学校　2年　松本 福夏
小田 翔七恵

第8回
茨城学生建築展

IBARAKI ARCHITECTURE
STUDENT EXHIBITION

展示期間 2022 2.17thu～公開致します。

（一社）茨城県建築士事務所協会のHP上で作品を公表いたします。

（一社）茨城県建築士事務所協会ホームページURL　https://www.i-jk.org

趣　旨

本協会は、建築文化の向上と発展に努め、公共の福祉の増進ひいては地域文化の活性化に寄与することを目指して活動しています。「茨城学生建築展」は、こうした趣旨の一環として発足しました。この賞は、県内に建築系学科を有する学校各位と連携のもと、優秀な作品を表彰し、学生諸君にエールを贈ると共に、交流を深め、建築設計業界が社会に貢献するための下地作りを目的として実施するものです。

前回参加校一覧

- 国立大学法人 筑波大学
- 国立大学法人 茨城大学
- 国立大学法人 筑波技術大学
- 筑波研究学園専門学校
- 日建工科専門学校
- 文化デザイナー学院
- 茨城県立 つくば工科高等学校
- 茨城県立 水戸工業高等学校

主催 一般社団法人 茨城県建築士事務所協会

〒310-0852 水戸市笠原町978-30 建築会館2階　TEL 029-305-7771　FAX 029-305-7791　https://www.i-jk.org

協　賛／（一財）茨城県建築センター　（一社）茨城県建築士会　（公社）日本建築家協会関東甲信越支部茨城地域会
後　援／笠間市　（株）茨城新聞社
協賛企業／総合資格学院つくば校　日建学院水戸校つくば校　常陸大理石（株）　（株）新日東　ミナト防災通信工業（株）
植田防水工業（株）　（株）山忠　（株）フジクリーン茨城　YKKAP（株）　（株）日立ビルシステム　（株）千代田興業
和知商事（株）　センター電機（株）　（株）角藤　（株）安心確認検査機構　草苅木工（株）　（株）染野製作所
（株）EMI確認検査機構　（株）エクロール　（株）ダイフレックス